

こんにちは！

めぐりん菜通信をお読みいただきありがとうございます。

今月号は、「生ゴミ処理機での好気性分解」と「汚泥の堆肥化」
「近郊の野菜栽培」をご紹介します。

2月は寒く、つらい時期ですが、日の出は少しずつ早くなっています。春は確実にやってきています。
(担当：齊藤)

生ゴミ処理機での好気性分解

「生ゴミ処理機って生ゴミを処理する機械だよな。どう処理してるの？」という、とても大事な質問がありましたので、今回は、それにお答えいたします。

生ゴミ処理機では、主に好気性微生物により生ゴミの有機物を水とCO₂に分解し、ゴミの減量、汚臭の解消を行っています。

好気性微生物は、酸素のある状態で活動し、生ゴミ処理機は、「いかに最適に微生物の活動を活性させるか」を追求した機械です。

好気性微生物(酵母など)



生ゴミ処理機の処理槽



・生ゴミ処理機の処理槽内では、シャフトが回転。攪拌し、酸素を取り込みます。

・槽内は一定の温度(30~35℃)に保たれ、微生物の分解をうながします。

籾殻と竹炭(微生物)

・水分調整をしながら上部から散水。消臭及び微生物の分解を助けます。

・微生物の床材として籾殻を使用。内部への酸素の取り込みを進めます。

・微生物を着床した竹炭の使用でさらに消臭効果を高めます。



処理槽攪拌中



好気性微生物の「ゆりかご」の完成です。

汚泥の堆肥化 検討中

生ゴミ処理機から出る発酵生成物を原料にたい肥を作りますが、生成物は、残念ながら食品残渣100%の純粋なもの安定して排出されるわけではありません。投入の段階で様々な異物が混入します。

この生成物もリサイクルできないかということで、汎用性の高い「汚泥の堆肥化」も現在検討中です。



近郊の野菜栽培

2月が出荷の最盛期で、近郊で栽培されている野菜となると.....そう、チンゲン菜です。

露地のチンゲン菜の旬は秋ですが、ハウス栽培に適しているため一年中市場に出回ります。愛知が全国4位の出荷量を誇り、安城市はその主産地です。



チンゲン菜は日中国交回復とともに入ってきた野菜ですが、現在は国内の生産が増加し国産野菜になっています。